

研究

中島子玉著「日本詠史新樂府」(三)

解説・切り絵 佐藤 巧

編集・校正 鶴野博文

(会員)

過仲綱 (仲綱の愛馬、奢る平家を久しうせず)



(樂府詩)

(読み下し文)

過仲綱跨仲綱

仲綱を過て、仲綱に跨れ

馬額印字烙痕凹

馬の額に印字し烙痕凹めり

誰図中有禍機藏

誰ぞ図らん中に禍機藏みあるを

一馬先嘶萬里應

一馬先ず嘶けば万里に応え

乾坤變作血戰場

乾坤變じて血戰場と作る

君不見

君見ずや

西海雲腥龍戰野

西海雲腥く龍、野に戦う

踏碎君家是此馬

君家を踏み碎くは是れ此馬なり

(語釈)

・ 過つ (|| 鞭うつ) (日本外史)

・ 跨る (|| 騎の) (日本外史)

・ 烙痕 焼き鑊を押しつけたあと

・ 禍機 わざわいのきっかけ

・ 乾坤 天地

・ 稠人 人を多くする

(漢文注釈の読み下し文)

伊豆守源仲綱に善き馬あり、宗盛之を求む。献ぜず。之を復し、使者、途に相望む。其の父三位頼政、禍を懼れ、強いて焉を献ぜしむ。

宗盛、其れを恠(吝)なりと謂い乃ち馬額に烙印するに

仲綱の二字を以てす。

広き座に稠人せしめ、鞭ちこれを牽き出させて曰く、

「仲綱に鞍を付けよ、仲綱を鞭打て、仲綱に跨がれ」と、以て戲笑をなさしむ。

仲綱聞きて焉こゝれを怒る。頼政曰く「吾、老いたり。汝の為に死せん」と。遂に親王もろこし以仁に勧めて兵を挙げ。

事成らずと雖も、義を主唱し、乱を誅し、天下に義氣を感発せしめ卒ついに平氏を除きたるは、実に頼政父子の功なり。

（事件の背景）

一一六〇年（平治の乱の翌年）から二〇年間が平家の急激な繁栄と没落の期間である。

一一六七年、わずか八年間で、清盛は従一位太政大臣、重盛は正二位内大臣、宗盛は従二位右大将など、公卿一門（平氏）に集まる。という状況のとき頼政は正五位下だった。というのは後白河は平家の武力と経済力が院政強化のため必要だったので、超異例の位打ちと拔擢ぼつてき人事を強行、ために源氏でありながら唯一人清盛に味方したのに極端な昇進の不均衡に疎外感を抱いていた頼政は苦勞無しの平家の御曹司の不躰な驕り高ぶりに遭遇することになった。

一方、以仁王については、後白河の第二皇子であるにもかかわらず生母が摂関家の出でないとか建春門院（滋子＝清盛の妻の妹）の嫉みなどで、親王宣下も無く、これもまた皇統から疎外されていたので頼政親子と結びつくことになる。保元の乱の場合とよく似ている。

（通釈）

伊豆守源仲綱は名馬で有名な東北育ちのすばらしい馬を持っていた。それは父頼政が清盛の推薦で従三位に昇進した祝に東北の和田義盛（平家）から贈られた馬で、木ノ下、という名がついていた。

一一七九年（治承三年）内裏で馬揃え（觀兵式）があり、父、多田源氏棟梁源頼政の代理で仲綱がこの名馬に乗り、摂津多田源氏の指揮を取った際、その指揮ぶりと乗馬のすばらしさが評判になった。

そこで宗盛、最高指揮官の右大将である自分にこそこの馬はふさわしいと思い、頭から譲れ、と強請ごうせいする、いや、これはさる人からの贈り物だからと断ると、さらに（父親の昇進は誰のお蔭だ）とばかりに強請は続いた。頼政は、これでは禍となると恐れて無理に献上させた。

宗盛の方は大上司である自分に対しては甚だケチな態度ではないか、と馬の額に「仲綱」と烙印して、大勢の前で愚弄嘲笑させた。

現代の自家用車と違い、感情も心も通じる武士の乗馬は家族に等しい。頼政は歌道にも通じた文武の心豊かな人格者だったが、ついに平家を見限り、以仁王（親王は子玉の誤り）に挙兵を勧めるに至る。しかし、短時間で敗北、両方とも戦死するが、子玉が伝えたかったことは、この挙兵は朝廷の乱れを正し平家の驕りを止めさせる一大義であり、天下に義氣を渙発せしめ、遂に平家を倒したのは、一馬先ず嘶く、という役を見事に果たした頼政親子の大功である、ということではないだろうか。



鼠_{ネズミ}猫_{ネコ}（鼠、猫を_ネる。頼朝拳兵、源平逆轉）

(樂府詩)

(読み下し文)

蛭島昔與魚蝦侶

蛭ヶ島昔魚蝦與侶す ぎよかととも

平氏は猫源氏鼠

平氏は是猫也源氏は鼠なりねずみ

富士川頭白旗飄

富士川の頭ほとり白旗ひるがえ飄りて

平氏は鼠源氏猫

平氏は鼠源氏は猫となる

鼠窮噬猫猫輒走

鼠窮して猫を噛む猫輒走る すなわち

棄甲曳兵相蹂躪

甲を棄て兵を曳き相蹂躪す

如鼠凶猫竟如何

鼠猫を囚るが如しとは竟に如何

吾今宥汝為乳母

吾今乳母の為に汝を宥す

豈無劍斬首藤首

豈首藤の首斬る劍無からんや

(通釈)

蛭が小島は頼朝の流罪地で昔は魚や蝦えびと一緒に暮らしているような土地で、その頃、源平の力関係は猫と鼠に例えられるが、実は頼朝の拳兵に反対した首藤経俊の言った言葉だった。

しかし、富士川に源氏の白旗が上よろいかぶとがると一挙に形勢逆転、平家軍は水鳥の羽音に驚愕して鎧兜をすてて互いに踏み躪にじりあいながら敗走した。

その後、鎌倉に引き揚げた頼朝が論功行賞を行った際

首藤経俊に「鼠が猫を図るようなとは、つまりどういふことか」と問い詰めて「今度だけは俺の乳母だったお前の母親に免じて許してやるが、経俊、お前の首を斬る剣が無いわけじゃないんだぞ」と叱りつけた。

(注釈文の読み下し)

頼朝の蛭島に在るや北条時政を倚る。以仁王の令旨至るに会い頼朝大いに喜び陰かに時政と挙兵を謀り、安達盛長をして令旨を伝え関八州の豪傑に曆説せしむ。

首藤経俊独り聴かず、之を嘲笑して曰く、「流人を以て平氏を図るは猶、鼠、猫を図るがごとき耳」と。

清盛、石橋(山)の敗(戦)を聞き大いに喜ぶも、既にして頼朝未だ死せずして兵勢復び振るうを聞き則ち恐れ、乃ち孫の惟盛、弟忠度をして五萬騎をもつて之を拒がしむ。

頼朝、惟盛と富士川を挟みて陣す。河の水方に漲り、両軍相持して未だ戦わず。

武田信光、兵を潜め間道より夜西軍の後ろに出づ。道徑は大いなる澤なり。鵝鴨驚きて起ち、西軍大騒して潰走す。

頼朝鎌倉に還り、大いに刑賞をおこなう。首藤経俊を召して曰く、「鼠、猫を図るとは如何」と。將に之を斬らんとす。その母、嘗て頼朝を乳養す。哀を請うにより之を宥す。

(語釈)

・令旨 天皇が発する綸旨に対し、それ以下の皇族が

出せる命令書で親王や王も出せる。(以仁王)

・関八州 (相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上

野・下野)

・鵝鴨 (あひるやかも、ここでは水鳥を総称)

(挙兵の背景)

平家の勢力下にある小島に流された頼朝は、全くの天涯孤独ではなく、陰ながら、密かに金品や身のまわりの世話をする者たちがいた。

先ずは、もと頼朝の三人の乳母の一人、比企ノ尼である。武門の鉄則である敗者族殺を曲げて頼朝の命を救った池ノ禪尼の所領だった比企郡中山郷を貰っていたので、そこを根拠に金品のみならず、女婿の安達盛長など配

所の近くに住まわせ、身の回りの世話をさせ陰の側近の役を務めさせていた。

もう一人の乳母の妹の子が三善康信、中宮職属で京都の情勢を折々に頼朝に伝えていたという。

さらに、この微少な勢力のなかでの中核は北条政子である。なぜ父の時政とあえて言わないかと言うと、頼朝は強運とともに天賦の美貌がこの源平逆転の伏線をなし、歴史の妙味を人々に示しているからである。

（通釈）

一一八〇年（治承四年）平家の急上昇から二〇年目、急降下に転ずる最も問題の多い年となる。

時政の世話になっていた頼朝に以仁王の令旨が届いて時政と拳兵を謀るが、頼朝の手兵は皆無にひとしいので比企ノ尼の女婿、安達盛長に関八州の豪族達の参戦を勧誘して廻らせたが、まだまだ平家の外見はしつかりとして見えているので、この大それた謀反に加担しようとする有力な大豪族はほとんどいなかった。其の時、首藤経俊が、流人のくせに鼠が猫を獲ろうとするようなまねは止めておけ、と言つて、しかもその後石橋山で大庭景親らと

共に頼朝軍を攻めて敗戦させている。

清盛は頼朝敗死せり、の第一報にぬか喜びさせられ、続く報告で頼朝は死なず、兵勢を盛り返していると聞き、恐れて孫の惟盛、弟の忠度（ただのり）に五萬騎で以てこれを防がせた。

頼朝と惟盛は富士川を挟んで陣をしくが、ちょうど増水の時だったので、両軍とも対峙したまままだ戦わないでいるとき、甲斐源氏の武田信光は兵を隠し、間道を通じて西軍の後ろに出ると、そこは大きな沢だったので水鳥たちが驚いて一斉に飛び立った。その羽音を敵の夜討ちと思つた平家軍は大騒乱となり一戦も交えずして、ひたすらに潰走した。

頼朝は鎌倉に還つて大いに論功行賞を行つた際、首藤経俊のあの味方の士気を貶めるような猫鼠の雑言許し難く、即斬るべしと、刀の柄に手をかけたかったが嘗ての乳母のため、「豈、汝の首を斬る剣無からん、（どうしてお前の首を斬る剣が無いということがあろうか、ここにあるぞ）、と厳しい叱責に代えて経俊を許したのである。

経俊と共に頼朝を攻めた大庭景親は斬られている。

馬條慢し (宇治川の先陣争い)



(樂府詩)

(読み下し文)

馬條慢何不約

馬條(馬の腹帯) 慢し何ぞ約ばざる

口御弓弦手約條

口もて弓弦を御し手もて條を約ぶ

不慮先鞭被人首

先鞭を人に拝せらるを慮わす

両龍蹴波波噴雪

両龍波を蹴つて波雪を噴く

汗灑菟道河邊血

汗と灑る菟道川辺の血

將軍御士如御馬

將軍士を御すこと馬を御すが如し

一磬一控

磬すべきか控すべきか

自有訣兩名馬双英傑

兩名馬双英傑に自ら(秘)訣あり。

(語釈)

・馬條 (ばとう)、馬の腹帯

・先鞭 人より先に鞭を入れて抜け駆けし、巧名をなす

こと(中国の故事より)

・磬と控 (馬を) 走らせたり、停めたりのこと

・両龍 梶原景季と佐々木高綱

(通釈)

「お主、馬の腹帯が慢んでいる、何で締めないんだ」と

高綱が言う、景季、なるほど、弓弦を口でくわえ締めな

おしている隙に高綱が先にムチを入れて先頭に出た。

二人は白波を蹴立てて先陣を争いながら、流血汗の如

く滴る彼岸の戦場を目指して進んでいく。

頼朝は両雄に巧みに名馬を与えて、命がけの働きをさ

せること、まるで馬を御すようである。

進めるか退くか、二頭の名馬と二人の英傑の扱いの秘

訣を自ずから心得ている者にしてできることである。

(注釈文の読み下し)

義仲、暴を行うこと日々甚だしく、法王頗る苦しめらる。ひそか私に使いし、頼朝を召し京師に來らしむ。

頼朝、兵を範頼のりより、義経に委ね、令に因りて曰く、「木曾、我が兵を必ず宇治河に於いて阻まん。皆、善き馬を具し騎して以て渡るべし」と。

頼朝に駿馬二つあり、曰く「摩墨するすみ」「池月」といふ。梶原景季、池月を得んと先に登り請う。頼朝許さず、乃ち摩墨を与う。

明くる日、佐々木高綱近江より來り謁して曰く、「臣若し軍に従がわば、敢えて生を期せず、一たび君に見え訣別し且、指揮を奉ぜんと欲し、駆けること三日にして達るも、臣唯一馬のみにして、罷れて用いるべからず、ゆえに期に後れて此に在り」といふ。乃ち池月を出して之を賜う。

高綱、喜謝して曰く「高綱死なずんば先登の功必ず他人にあらざらしめん」と。拝舞はいむして出づ。

すでに範頼、勢多に向かい義経は宇治に向かう。

義仲之を聞き戦守を議り、宇治川を距て、橋板を撤して柵を豎て、水中に縄を張つて之を守らしむ。義経、騎二万

五千を以て東岸に距つ。

二騎あり、馬に鞭打ち流れを渡りて進む。

先んずる者は景季、後るるは高綱なりしが、則ち超乗して進み岸に上る。景季、踵いで上る。

義経全軍を以て之に継ぎ、撃つて大いに之を破る。

功簿を上(申)するに及び、高綱を先頭第一とし、景季を第二となす。

(語釈)

・京師「京」「大」「師」「衆」、都、京都

・超乗 追い越す

(背景説明)

なぜこの二人が、將軍に対して、しかも直に名馬を所望できたのか、その経緯は、

〔梶原景季〕父は景時、かの石橋山で頼朝敗戦、逃げ場を失い潜伏していた場所を、其の時は敵方だった景時が発見するが、上司の大庭景親に報告せず見逃して頼朝を助けた。景季はその命の恩人の嫡子というわけである。

〔佐々木高綱〕父は、琵琶湖東岸、佐々木莊の佐々木秀義、

平治の乱で義朝に付き惨敗、佐々木莊を失い、四人の息子のうち二人と共に奥州の藤原氏を頼ろうとして北上の途中、相模国渋谷荘の渋谷重国（平家方）に武勇を惜しまれ、寄寓の申し出を受け貧窮に耐えつつ二十年目にして頼朝の挙兵に応じた。

息子達は順に、定綱、經高、盛綱、高綱（末子）。

一一八〇年（治承四年）平治の乱、源氏惨敗の年から二十年目、八月十七日を頼朝決起の日と定めたが、皆無に等しい手勢は武勇を頼みとする佐々木四兄弟を待ちに待ったが、約束の日が過ぎてもなかなか到着しない。最早裏切りかと極め付けられんとする間際、長年の貧窮生活で武器は揃わず、馬は二頭だけで弟の二人は徒士^{かち}だった、日本外史には「甲冑弊^{かつちゆうへい}悪、羸馬繩轡^{るいばじょうひ}なり。頼朝、之を見て、慘然^{さんぜん}として涙下る」と。（甲冑は甚だ粗悪で、貧弱な馬に繩の轡ではないか。なんといたいたいし忠節と信義の士であるか。疑って済まなかったと）、まさに、佐々木源氏の、走れメロス、だった。

その後、伊豆国府目付、堤権守屋敷（警察署に相当）をほとんど佐々木三兄弟（高綱を含む）だけで襲撃、目付を討ち取っている。

（通釈）

木曾義仲の軍勢の暴虐に苦しむ後白河法王は、ひそかに頼朝を召し義仲の討伐を命じる。

源氏軍は、木曾軍が宇治川で防戦すると観て、良馬を用意して騎馬で渡河せよ、と命じてあった。

ときに、頼朝は、池月、摩墨、という二頭の駿馬を持っていた。

梶原景季は、先に来て池月を頂きたいとお願ひしたが頼朝は許さず、摩墨を与えた。

明くる日、佐々木高綱、近江からやって来て、頼朝に拝謁し、「この度、もし従軍したならば敢えて死も厭いませんが、一目君に見えてお別れのご挨拶をし、且、お指図などお受けしたいと出発し、三日駆け続けてやっと着いたところですが、一頭しかない馬は疲れ果てて乗ることができず、期に後れました」とお詫び申し上げた。

（それを聞いて頼朝）それではと、池月を曳き出させて之を高綱に賜った。

高綱大いに喜び且つ感謝して「臣高綱、戦死せぬ限り、先登の功は他人には渡しません」と言い、鄭重に拝舞^{はいむ}の礼をして御前を下がった。

すでに範頼は勢田、義経は宇治に向かった。

義仲は防戦策として宇治橋の橋板をはずして柵を建て、水中に大縄を張って守っている。

義経軍二万五千騎が東岸にはなれて待機していると、二頭の騎馬に突然ムチを打って流に乗り入れた武士達、先頭は景季、後は高綱だったが、追い越して先に上陸、踵を接して景季が岸に着いた。

義経が全軍を率いて之に継ぎ、撃つて大いに敵を破った。功簿には「先登第一佐々木高綱、第二梶原景季とす」と、上申された。

(編集メモ)

一八二七年(文政一〇年)、頼山陽は日本外史を二十年がかりで完成、その勢いにのり、「日本楽府」を一気に書き上げて篠崎小竹らに序文などを依頼のため、原稿を見せたところ、彼らは「難解、十分の一も理解できない」と言うので、では、注釈(楽府の背景の解説文)を付けたら、となったが、二十年かけた畢生の大作、日本外史が基礎となつてゐる楽府の注釈が書けそうな人も、引き受ける人も見つけるのに苦心、山陽の門弟の、牧百峰まきひつほうに書かせるこ

とにしたが、この高弟ですら注釈を完成するのに四年もかかった。

子玉の楽府も山陽のものを参考にしてゐるので形式は同じである。なぜこんな話を紹介するのかと言うと、もともと難しいものだからと、読者を安心させ、浅学の筆者も精神的余裕をもつて仕事をしたいからである。

彼らの漢学と中国を含む歴史的故事の知識は我等の想像を絶するほど高いので、子玉の楽府の背景を知る苦労も容易ではないが、少しでも理解できたときの喜びを讀者と共有したいものである。

